

# 外国人子女教育をめぐる中学校教師の意識と高校入試特別枠制度

—静岡県浜松市における調査から—

鈴木 正 行

## 要 旨

本研究の目的は、外国人労働者の定住化が進行する状況の中で、外国人集住地域における外国人子女教育の現状と課題を明らかにすることである。筆者は、静岡県浜松市内の中学校社会科担当教師へのアンケート調査や、浜松市立高等学校インターナショナルクラスの教師・生徒への聞き取り調査を行った。調査を通して、①外国人子女の在籍する教育現場では、支援員の派遣などの施策がなされているものの事態が改善しておらず、教育現場における行政や企業に対する要望が蓄積していること、②学校現場の教師は、外国人生徒への対応だけでなく、保護者とのコミュニケーションにおいても困難を抱えていること、③浜松市立高等学校インターナショナルクラスでは、外国人生徒たちが学校に好感を持ち、将来への希望を抱くことができていること、などが確認された。

キーワード：外国人子女教育、高校入試特別枠制度、インターナショナルクラス、多文化共生

## I. はじめに

本研究は、外国人労働者の定住化が進行する状況の中で、静岡県浜松市内の中学校社会科担当教師へのアンケート調査や、浜松市立高等学校インターナショナルクラスの教師・生徒からの聞き取り調査などを通して、外国人子女教育の現状と課題を明らかにすることを目的とする。

1989年の「出入国管理及び難民認定法」(以下、入管法とする)の改正(1990年施行)以来、ニューカマーと呼ばれる日系ブラジル人・ペルー人労働者の来日が急増した。当初は短期就労を目的とした単身での来日であったが、やがて家族を帯同した長期の就労となり、2008年のリーマンショックによる混乱を経て、現在では

永住化の方向へと進んでいる。彼らは、将来に渡って日本社会の永続的な構成員となる可能性が高く、外国人労働者子女の教育・進路問題は、一次的な適応ではなく、社会的統合という観点から捉え直す必要に迫られている<sup>(1)</sup>。

外国人労働者とその子女を取り巻く状況については、これまでも雇用・労働環境、家族・家庭、教育・進路、医療、社会保障、地域生活、差別問題など、様々な角度から多くの調査・研究がなされている。

例えば、志水・清水(2001)は、入管法改正から約10年が経過した1999～2000年時における愛知県在住のブラジル人家庭を調査し、家族の物語が、出稼ぎを目的とする一時的滞在と父祖の地への回帰によって構成される「一時的回帰

の物語」から、滞在の長期化の理由を経済的安定と安全に見出す「安定の物語」へと変容して、子女の教育戦略の選択が変化していることを明らかにした。

また、梶田・丹野・樋口(2005)は、「移民国家レジーム」(入国管理+移民統合)と「移民ネットワーク」という二つの概念の関係を軸に、1980年代から2000年代初期に至る日系ブラジル人の移住過程について詳細な調査・分析を行い、日系ブラジル人移民が市場原理に翻弄されるとともに、市場が生み出す外部不経済を地域社会が支払う構造を指摘した。その際、梶田らは、教育に関する問題として、主に学齢期の外国人子女の不就学を取り上げている。ただし、不就学を統計上減らすために、取りあえず地域の公立小中学校に収容するという、国及び地方自治体の場当たりの政策によって、末端の学校現場が深刻な影響を受けている状況について、具体的に掘り下げられた言及はなされていない。

このほか、外国人学校や公立学校の受け入れ状況、不就学問題等に関する国や自治体の施策を調査した吉田(2008)は、外国人子女の学習のための専門支援員や初期指導教室など、文部科学省による「生活適応プログラム」が、国の対応の遅れを取り戻すものとなることに期待を寄せている。しかし、現状を見る限り、とてもその期待に応えられているとは言い難い。

南米系外国人子女の多くは、不安定な家庭環境、日本語の語彙力の不足による低学力、貧困、文化的差異等の不利な状況の下で、独特のコミュニティをつくりながら生活を送っている。日本に生まれ育ち、普段の生活にあまり支障のないように見える子どもたちでも、学習言語力の不足等から、学習の遅滞が生じやすい<sup>(2)</sup>。そして、中学生になると、高校への進学や職業への関心が芽生えるとともに、将来への不安と失望感・諦念観が漂い始める。それは、彼らが社会の底辺へと位置づけられていく過程でもある。宮島(2013)によれば、滞日外国人子女の貧困の連鎖は、親の非正規雇用・失業による剥奪、家族生活の危機と関係性の喪失による剥奪、学校教育の機会からの排除による

剥奪という「三重の剥奪」によってもたらされる。そこから生じる「希望」の喪失は、日本社会に深刻な影響をもたらすことが推測される。だが、本来子どもたちに希望の光をともし役割を担うべき教育現場は対応に苦しんでおり、現在でもこの状況が大きく改善されたというわけではない。

これまでの研究では、学校への支援員の派遣や日本語教室の開催などの支援が、それを必要とする人々に届いていない現実や、受け入れ指導にあたる現場の教師たちの切実な訴え等については、あまり深く踏み込まれてこなかった<sup>(3)</sup>。また、将来への希望を外国人子女たちが抱くことができるようにするための具体的な制度についても、ほとんど言及されてこなかった<sup>(4)</sup>。

そこで、本稿では、こうした課題に迫るため、次のような方法で考察を行う。

- ①外国人集住都市として知られる静岡県浜松市の中学校社会科担当教員を対象に、外国人子女の教育・進路に関するアンケート調査を行う。中学校の社会科教員を対象とした主な理由は、ア)外国人労働者を雇用する企業の経済活動によって生じる外部不経済のしわ寄せが、公立学校に押し寄せていること、イ)日本語による複雑な概念操作を必要とする社会科の授業では、指導上の困難が生じやすいこと、ウ)社会科はグローバル教育・国際理解教育と関連が深いこと、エ)中学校の教師は、他の校種に比べて、外国人子女の進路指導に関わる機会が最も多いこと、などである。
- ②浜松市立高等学校のインターナショナルク

表1 浜松市在住の外国人の人数  
(2017年4月1日現在)

国籍	人数(人)	国籍	人数(人)
ブラジル	8,618	韓国	1,191
中国	2,478	ベトナム	1,801
フィリピン	3,461	インドネシア	762
ペルー	1,680	その他	1,829
		合計(83カ国)	21,820

浜松市の総人口 807,414人  
浜松国際交流協会 <http://www.hi-hice.jp/index.php> より引用

ラスに在籍する外国人生徒や担当教員を対象に、授業や学校生活、進路等に関する聞き取り調査を行う。同クラスは、外国人生徒に対する日本版アフーマティブ・アクションとして注目される。同校は、静岡県西部地域で有数の進学校であり、同クラスは大学への進学を前提としている。外国人子女にとり、大学への進学は社会的上昇の足がかりとなるため、将来への「希望」という観点から課題に迫ることが期待できる。

## II. 外国人子女の教育をめぐる教師の意識

### 1. 調査対象地域の概要

浜松市及びその周辺地域(磐田市・湖西市)は、スズキ株式会社(自動車等)、本田技研工業株式会社(自動車関連部品等)、ヤマハ株式会社(楽器等)、ヤマハ発動機株式会社(エンジン等)などの大企業の工場とその下請け企業が集中しており、日系ブラジル人やペルー人、中国人、フィリピン人など、多くの外国人労働者とその子女が暮らしている(表1)。静岡県の調査によれば、2016年5月1日時点で、同地域の小・中学校に在籍する外国人児童・生徒は、中学生661人(浜松市490人・湖西市57人・磐田市114人)、小学生1891人(浜松市1455人・湖西市101人・磐田市335人)であった<sup>(5)</sup>。この地域には、ムンド・デ・アレグリア、エスコーラ・アレグリア・デ・サベール・浜松、エスコーラ・アウカンセなど、ブラジル人やペルー人のための外国人学校が開校されている。しかし、外国人学校の教育内容や存在形態は多様で、経営も安定しておらず、過去に閉校に追い込まれた学校もある。外国人学校に通わせるには保護者の負担も大きいため、外国人子女のほとんどは、地域の公立小・中学校が受け入れている。中学校卒業後、彼らは人材派遣会社や知人の紹介を通して工場で就労するか、あるいはアルバイトをしながら県立の定時制高校に進学する者が多い。しかし、進学した者の約半数は、途中で退学するのが実状である。

## 2. 調査の方法

浜松市内国公立中学校の社会科教員を対象に、外国人生徒への指導経験、指導上の課題、高校入試での特別措置の是非等について、アンケート調査を行った(表2・表3)。国公立中学校25校、62名の教員から回答を得た。内訳は、校長2名、教諭56名、講師4名(元教諭1名)であり、中学校での指導経験年数は、1年目～36年目というように幅広い年齢層であった。調査対象を中学校教員としたのは、主に以下の理由による。

- ①中学校段階は、外国人生徒にとって、日本人生徒以上に、その後の進路の方向性を左

表2 回答を得た浜松市内中学校教員の属性

単位：人

経験年数	男	女	全体	備 考
1～5	8	2	10	講師(男)3、教諭7
6～10	7	2	9	教諭9
11～15	4	0	4	教諭4
16～20	9	3	12	教諭12
21～25	4	1	5	校長(男)1、教諭4
26～30	5	0	5	講師(元教諭)(男)1、教諭4
31～35	8	4	12	校長(男)1、教諭11
36～40	4	0	4	教諭4(うち1名元教諭)
計	49	12	61	経験年数不明：教諭(男)1

※経験年数は、2016(平成28)年4月1日時点で、中学校教員としての勤務が何年日かを表している。

表3 外国籍生徒の教育・進路に関するアンケート

質 問
(1) これまでに担任した学級の中に、外国籍の児童・生徒が在籍したことはありますか。
(2) これまでに外国籍の児童・生徒がいる中で、授業を担当したことはありますか。
(3) 質問(2)で「ある」と答えた方は、授業の際に困ったことや苦勞したことはありますか。
(4) 外国籍の児童・生徒に高校入試特別枠などの特別な配慮が必要だと思いませんか。
(5) 外国籍児童・生徒の教育・進路について、先生のお考えをご自由にお書きください。また、苦勞していることや困っていることなどがありましたらお書きください。

実施期間：2016年9月～12月  
 浜松市内中学校50校中25校回答  
 (国立1校、県立1校、市立23校)  
 回答者：社会科教員62名  
 (校長2名、教諭56名、講師4名)

右する重要な選択の時期となっている。

- ②中学校段階は、外国人子女が、自らのアイデンティティーの形成に向き合い、将来への不安と諦念観を持ち始める傾向が強い。
- ③中学校教員は、上記①②の状況を迎えた外国人子女に直接関与し、彼らの抱える問題を経験的に承知している。
- ④社会科の教員は、他の教科の教員に比べて、授業の中で国際理解教育やグローバル教育に関する内容を扱う機会が多く、問題意識が高いことが予想される。

### 3. 分析・考察

#### (1) 外国人児童・生徒の指導経験について

質問(1)は、学級担任として、これまでに

外国籍の児童・生徒を担当したことがあるかどうか問うたものである(資料1)。62名のうち、「ある」と答えた教員が48名(77.4%)、「ない」と答えた教員は14名(22.6%)であり、約8割が外国人児童・生徒を受け持った経験があると答えている。筆者も、公立中学校の学級担任の時には、ほぼ毎年学級内に外国籍の生徒がいた。教科担任として、外国籍の児童・生徒を担当したことがあるかどうかを問うた質問(2)では、実に60名(96.8%)の教員が「ある」と答え、「ない」と答えたのは、経験年数1年目のわずか2名(3.2%)であった(資料2)。浜松市では、外国人児童・生徒と接することなしに教員生活を送ることは、ほとんど不可能である。

資料1 質問(1)に対する回答

	ある	ない	計
人数	48	14	62
割合(%)	77.4	22.6	100.0

<担任をしたことがあると答えた教員の人数と児童・生徒の国名>

国名	ブラジル	ペルー	アメリカ	イギリス	フランス	ドイツ
人数	44	27	3	0	0	0
国名	中国	ベトナム	タイ	インドネシア	フィリピン	韓国・北朝鮮
人数	19	11	1	2	30	11
国名	パキスタン	ボリビア	スペイン	オーストラリア	ベルギー	ウクライナ
人数	1	1	1	1	1	1

※国名は不明だが、イスラム圏の生徒を担当したと答えた教員が1名あった。

※本調査での中国については、台湾籍を含む。

資料2 質問(2)に対する回答

	ある	ない	計
人数	60	2	62
割合(%)	96.8	3.2	100.0

<授業を担当したことがあると答えた教員の人数と児童・生徒の国名>

国名	ブラジル	ペルー	アメリカ	イギリス	フランス	ドイツ
人数	55	34	5	1	0	1
国名	中国	ベトナム	タイ	インドネシア	フィリピン	韓国・北朝鮮
人数	33	11	1	3	39	16
国名	パキスタン	ボリビア	スペイン	オーストラリア	ベルギー	ウクライナ
人数	1	1	1	1	1	2
国名	ニュージーランド	コスタリカ				
人数	1	1				

※国名は不明だが、イスラム圏の生徒を担当したと答えた教員が1名あった。

(2) 外国人子女への指導の困難性

質問(3)は、外国人子女の指導を担当したことがあると答えた教員のうち、指導する上で困難や苦労を感じたことがあるかどうかを問うたものである(資料3)。感じたことのある教員は、「ある」35名・「ややある」16名、合わせて51名(85.0%)にのぼる。困難を感じた理由としては、i)言葉の問題、ii)学習意欲の問題、iii)生活習慣・文化・価値観の違いの問題、などが挙げられている。回答の記述には、「ブラジルから来たばかりで言葉がほとんど通じず、給食だけ楽しみに来ていたが、授業は全く理解できておらず、2学期から不登校になってしまった。」というように、言葉も習慣も全く異なる日本の教室いきなり入れられた子ども

と、担当教員の双方の苦悩が表れている。外国人子女への対応が比較的進んでいる浜松市においても、来日から学校への編入に至るまでの日本語習得・生活適応のためのシステムが整っているわけではない。せめて来日後半年間は、日本語の習得、日本の習慣や学校文化等を理解するための予備教育を受けさせ、ある程度の適応力を身に付けさせた上で、学校に受け入れるようにしてほしいというのが、教師たちの偽らざる気持ちであろう。特に社会科の場合は、日本語による概念操作が授業の中核を占めるため、教えることが難しい。外国人生徒にとっても、意味のわからない授業を受けなければならないことの苦痛は計り知れない。

資料3 質問(3)に対する回答と主な理由

	ある	ややある	あまりない	ない	計
人数	35	16	6	3	60
割合(%)	58.3	26.7	10.0	5.0	100.0

<ある・ややある>

- 在日経験0の生徒が日本語を話せず、書けない時。中国人生徒がいるクラスでの戦争授業。
- 日本語でのコミュニケーションがとれないため、個別の支援が必要だが、全体指導と個別支援を並立して行うのが難しいので、外国籍生徒に十分な支援ができない。
- 日本語がほとんど通じなかったり、漢字が読めないため、黒板の板書にひらがなでふりがなをふった。
- 言語力不足で聞いているだけになったり、言語の補充学習受講のためにしばしば欠課をしたことなど。
- 共通で理解できる言語が一つもないと厳しい。例えば英語など。
- ブラジルから来たばかりで言葉がほとんど通じず、給食だけ楽しみに来ていたが、授業は全く理解できておらず、2学期から不登校になってしまった。
- 日本語が全くわからない子には説明ができない。インターネットの自動翻訳を使ったこともある。
- 言葉がわからないレベルの生徒は経験したことがないが、漢字などの文字や学習内容にイメージしづらいものを教えているときに、生徒が苦しんでいた。
- 言葉の問題が一番です。教科指導での専門的な言葉の説明が難しいです。
- 日本語が分からない。学習意欲が乏しい。経済的に苦しく用具が買えない。
- 日本での居住経験が全くなく日本語が一切話せない生徒への指導が大変だった。
- 生徒の日本語能力が十分でなく、授業内容を伝えることが非常に難しい。
- 日本語、特に社会科の用語は外国籍の生徒には難しく、わかりやすいことばで説明するのが大変であった。また、社会的内容を説明する文章をつくることも難しく、どうしても社会が苦手になってしまう生徒を出してしまった。
- 価値観の違いを顕著に感じ、発言に窮した(例：新聞など時事ネタについて)。
- 外国の子どもたちにとって、日本史はどう受け止められているのか、どう感じて受けているのか、と疑問に思ったことがあります。
- 個別指導をする余裕がなかったため、学力が定着しない。
- 学習言語や概念の理解が困難。
- 日本語の説明と英語の説明をした(外国籍の生徒が座っているだけになってしまうため)。
- 言葉・語句の意味がわからない。特に日本の歴史を学ぶ必要性を感じてもらえない。
- 日本語の習得がままならない生徒にとって、社会科の用語は難しいものが多く、理解が進まない点。
- 地理の作業はやれるが、歴史についての理解は難しい。
- 周りと同じように授業を受けていても、内容理解が難しいので、授業中に何をさせるのか悩む。

<あまりない・ない>

- 日本語をしっかりと理解できる生徒だったから。
- 授業では苦労はないが、生徒指導上困ることが多い。
- 担当した生徒は、たまたま小5から日本の学校に通っていたため日本語が話せ、読み書きもできたので外国籍を理由とした苦労はなかった。
- 基本的には日本語で学習できるが、定期的に支援員の方に入っていた方がいいため。

(3) 高校進学での特別な配慮について

質問(4)は、高校入試における外国人生徒への特別な配慮が必要かどうかを問うたものである(資料4)。「思う」・「やや思う」と答えた教員は51名(82.3%)、「あまり思わない」・「思わない」と答えた教員は10名(16.1%)であった。配慮に肯定的な意見としては、「言葉の問題が一番大きな問題だと思う。日本語での中学校の授業が理解できない生徒が多いので、特別な配慮が必要です。」「日本語が読み書きできないことで、国語科以外の教科の実力が正しくはかる

ことはできないと考えるため。」というように、言語の問題に起因する不利益への配慮を必要とするものが多く見られた。また、「言語力のハンディーはある程度配慮する必要があるが、特別枠を持つ高校側の指導体制が十分かどうかは課題であると思う。」など、入学後の高校の指導体制の必要性を指摘する意見もあった。さらには、「特別な配慮で救われ、その後よい形で人生を歩める生徒もいるので必要。」「高等学校でインターナショナルクラスの様子を見たり、卒業後の進路を見たりすると、入試の配慮

資料4 質問(4)に対する回答と主な理由

	思う	やや思う	あまり思わない	思わない	無回答	計
人数	18	33	9	1	1	62
割合(%)	29.0	53.3	14.5	1.6	1.6	100.0

<思う・やや思う>

- しゃべれても漢字が読めない子もいるから(特に国・社)。
- 言葉の問題が一番大きな問題だと思う。日本語での中学校の授業が理解できない生徒が多いので、特別な配慮が必要。
- 言語力のハンディーはある程度配慮する必要があるが、特別枠を持つ高校側の指導体制が十分かどうかは課題であると思う。
- 日常会話は問題ないけど、ペーパーテストでは漢字がネックとなっている場合など、ふりがなをふるなどの配慮があってもいいと思う。
- 浜松市立高校のインターナショナルクラスなどはよいと思う。交通の便がよい高校のあき教室を使って外国人のためのクラスを作ればよい。遠い生徒はバスなどで送迎すればいいと思います。
- 意欲のある生徒には進学させてあげたいと思う。
- 本気で進学して勉強しようと思うのであれば多少の配慮は必要かと。
- 日本の滞在期間、日本語テストなどの結果で判断すべきだと思います。しかし、(3)でも述べましたが全員ではなく、ある一定の限度を設けてだと思えます。
- 国際化が進む以上、配慮は必要だと思う。
- 生徒のことを考えると必要ですが、高校側が入学後に合う教育が準備できるかが問題です。
- 特別な配慮で救われ、その後よい形で人生を歩める生徒もいるので必要。
- 内容は理解していても、日本語理解が不十分で答えられないことがある。
- 個々の学習意欲によっては、日本の環境に適應し、能力を伸ばすことが可能であるから、学習の場はきちんと確保すべきだと思う。
- 入試特別枠だけでなく、授業においても特別枠を設定しないと、入っても授業についていけないでやめてしまうことがある。きちんと支援ができる体制を高校でもつくらないと、将来日本に税を納めてくれる人を育てることができないのでは？
- 日本人と同じやり方で受けるのは大変だと思います。
- まず言語活動を最低限できるまでにしてから教室に入れないと、指導したくても今のままでは無理なことが多い。
- 高度でなくてもいいので、高校へ行って仕事に就きやすい環境づくりをしたらいいと思う。
- 高校レベルなら、外国人だけで学ぶ教室をつくる必要がある。
- 高等学校でインターナショナルクラスの様子を見たり、卒業後の進路を見たりすると、入試の配慮があった方が、その生徒の進路の幅が広がるように思います。
- 日本語が読み書きできないことで、国語科以外の教科の実力が正しくはかることはできないと考えるため。
- 多様性が求められると思うから。
- 外国籍にかぎらずLDの生徒がいる中で、一つの枠にとられない入試制度は必要だと思う。
- グローバルな生徒を育てるため。

<あまり思わない・思わない>

- 国籍は異なっても外国人とひとまとめにはできず、個人差が大きいため。
- きちんとした目的があればいいのですが…。また、中学校での授業の受け方、提出、保護者の協力等を考えた上で配慮したい。
- 基本的には必要はないと思う。ただ、能力のある生徒に配慮があるとよい。
- ある程度の配慮は必要だが、基本的には日本の進学のシステムに従うべきだと思う。
- 高校入学後に不適應や学習についていけなくなり、自己肯定感の低下につながるものが心配である。
- 日本で生活する以上、自分と家庭で適應を図っていく必要があると思うから。

があった方が、その生徒の進路の幅が広がるように思います。」「入試特別枠だけでなく、授業においても特別枠を設定しないと、入っても授業についていけないでやめてしまうことがある。きちんと支援ができる体制を高校でもつくりないと、将来日本に税を納めてくれる人を育てることができないのでは？」のように、外国人生徒の将来の進路について言及する意見もあった。さらに、「意欲がある生徒には、配慮があれば一助となります。」「意欲のある生徒には進学させてあげたいと思う。」など、意欲をもつ生徒の可能性を広げたいと記す者も見られた。

外国人児童・生徒の教育・進路に関する自由記述(資料5)では、「外国籍児童・生徒に苦慮している学校も多いので、加配等の人的手当をもっと多くすべきである。産業界のしわ寄せを学校が受けている感がある。学校は託児所ではない。」「全く日本語が話せない生徒を小・中学校に通学させるのは、現場にとって大変な負担だと思う。生活習慣の違いがある場合、さらに負担は増えると思う。ブラジル人に限って言えば、日本に来る人数が少なかったころは、ブラジル人生徒も日本語を覚えようと頑張っていたように思うが、増え始めると同じ学校にブラジル人生徒が多いとその意識が低くなったように思う。」など、学校現場の切実な状況が記されており、行政面での施策の遅れが、結局は学校現場へのしわ寄せとなっていることがわかる。

このような厳しい指摘の背景には、「将来的に日本で生活しようとしている生徒への日本語支援を手厚くしていく必要があると感じます。日本語の読み書きがほとんどできない生徒に、日本語で社会科の授業をするのは心苦しく感じることが多々あります。生徒本人のためにも教員の負担を減らすためにも、個別の支援をきめ細やかにできるようになると良いと強く思います。」「生徒は夢を持っていますが、それを支援してあげる体制がありません。多くの外国籍生徒の進路は、大平台高校の定時制に行き、働くことです。生徒たちの夢を伸ばしてあげる体

制を、中・高・大できちんとつくっていくことが大切であると思います。」というように、教員が感じている矛盾やもどかしさがある。そのことが、「寛容に外国人を受け入れるならば、学校教育と言語活動をしっかりさせる支援を。何でもかんでも受け入れて学校任まかせでは、本人が気の毒。言葉が通じない人(子ども)に教育をしろというのは、どうしても無理。」という怒りにも似た言葉となって表れている。むしろ、この言葉が多くの教員の偽らざる気持ちであると考えられる。

また、「本人とコミュニケーションをとるのも大変だが、保護者とコミュニケーションをとるのも大変だと感じることもある。」という指摘も重要である。保護者とは、学校生活に関することに止まらず、学年費や給食費などの校納金の納入など、様々な面でコンタクトを取らなければならない。しかし、日本語をほとんど解さなかったり、欠席連絡を怠ったりするなど、意思の疎通を図れない場面が多々ある。浜松市では、ポルトガル語やスペイン語のできる支援員を置いて対応を行っているが、時と場の設定に限界があり、十分に機能しているとはいえない。とくに外国人児童・生徒の多い学校には、バイリンガルの支援員が常駐していることもあるが、人数や時間、施設等が限られており、とても現場のニーズに応えられるような体制ではない。学習支援についても、NPO法人浜松外国人子ども教育支援協会理事長の田中恵子氏によれば、通常の教科書では役に立たないため、自作教材等を用いて奮闘しているものの、継続的な支援が難しいとのことであった<sup>(6)</sup>。こうした方々の地道な努力によって、支援が何とか持ちこたえられているのが実態である。浜松市内には、NPOやボランティアで日本語支援に携わっている人たちがいるが、その最前線では外国人の児童・生徒を取り巻く様々な矛盾や課題に突き当たっている。行政、支援団体、学校のいずれも、出口の見えない中で課題を積み残しながらも、一歩ずつ前に進むための努力を重ねている状況である。

さて、言葉の壁以上に大きな問題がある。そ

## 資料5 質問(5)に関する主な記述

**【言語力や学力について】**

- 将来的に日本で生活しようとしている生徒への日本語支援を手厚くしていく必要があると感じます。日本語の読み書きがほとんどできない生徒に、日本語で社会科の授業をするのは心苦しく感じるが多々あります。生徒本人のためにも教員の負担を減らすためにも、個別の支援をきめ細やかにできるようになると良いと強く思います。
- 全く日本語が話せない生徒を小・中学校に通学させるのは、現場にとって大変な負担だと思う。生活習慣の違いがある場合、さらに負担は増えると思う。ブラジル人に限って言えば、日本に来る人数が少なかったころは、ブラジル人生徒も日本語を覚えようと頑張っていたように思うが、増え始めると同じ学校に多くのブラジル人生徒が多いとその意識が低くなったように思う。
- 通常学級に入る時、それなりの学習する力と言語理解力は必要だと思います。
- 地域環境(住宅価格など)の影響で、外国籍生徒の校区別偏在が問題であると思う。行政とタイアップしていかないし解決は難しいのではないかと。また外国人団体や関係NPOとも連携してキャリア教育プログラムを作るべきだと思います。
- 元城小の空き教室で行っている日本語教室は価値のあるものだと思います。基本的な日本語を理解しなければ授業は成立しません。体育や美術などは、一般の生徒に合流しても、授業は可能だと思います。
- 学ぶ意欲はあるが、全体指導の中で言葉の理解が不十分で困っている生徒が多いと感じる。個別指導が手厚くなるとよいと思う。

**【多様な国籍・文化・生活について】**

- クラスの中にアメリカ人とブラジル人がいたり、宗教上の問題で行事の参加がうまくいかないときがある。
- 現在、あまりにも多くの国籍の子がいて、文書など理解できず、説明にも苦勞することが多いです。
- 生活習慣や価値観の違いなど、尊重できる部分と、生徒に適応してもらいたい部分の両面があり、生徒自身やその保護者に理解を得るところに難しさがあります。

**【外部の支援について】**

- 外国人生徒支援サポーターの存在が大きい。ある程度、英語や日本語でコミュニケーションがとれるようにならないと困る場面が多いと思う。
- プリント作成やテスト作成時のルビなどをふってくれる専門のサポーターが必要。この作業だけでも、非常に重たいものであり、サポート体制があることも助かる。

**【行政の施策・対応について】**

- 教頭時代に、母国での経歴が不明の、初期指導も受けていない、言わば「直輸入」の外国人生徒が転入してきたため、校内が大混乱に陥ったことがあった。日本生まれで日本育ちの外国人生徒が母国に帰国すると、その語学力の低さが災いしていると聞くことから、外国籍生徒へのネイティブな語学指導の必要性を感じている。
- 教育を受ける権利が認められてもよいと思う。受け入れのための体制を整えてほしいと思う。教育にもっと予算を回して、対応するための職員を増やして、言葉の壁を取り除いてほしい。
- 対応に苦慮するが、指導に対し徹底した支援・補助があるわけでもなく、担任や学年の教員が対応するしかない。就学の義務のない生徒への対応で疲弊し、義務のある生徒への対応に苦しさが生じる現状に矛盾を感じる。
- 生活環境や学習能力の差が大きいと感じます。いろいろな形で学ぶ場が必要であり、単に学校教育の中に形式的にあてはめればよいとは思えません。
- 生徒は夢を持っていますが、それを支援してあげる体制がありません。多くの外国籍生徒の進路は、大平台高校の定時制に行き、働くことです。生徒たちの夢を伸ばしてあげる体制を、中・高・大できちんとつくっていくことが大切であると思います。
- 寛容に外国人を受け入れるならば、学校教育と言語活動をしっかりさせる支援を。何でもかんでも受け入れて学校任せでは、本人が気の毒。言葉が通じない人(子ども)に教育をしろというのは、どうしても無理。
- 市も協力してくれているが、語学堪能な支援員のさらなる増員などを行ってほしい。
- 進学・就職は、日本人と同一に進めるのは無理。県・市教育委員会など、行政レベルで解決を図ってほしい。
- 外国籍児童・生徒に苦慮している学校も多いので、加配等の人的手当をもっと多くすべきである。産業界のしわ寄せを学校が受けている感がある。学校は託児所ではない。
- 多文化社会の広がりとして受け止める必要があると思うが、国によって法や社会のしくみの違いがあることを、入国した立場の人がまず理解し、適応していくことが必要だと思う。そして行政はその支援をする。

**【将来の進路・就職について】**

- 本人と保護者は公立高校を希望しているが、特に配慮のある科を受けるわけではないのでなかなか難しい。
- 外国籍生徒の就労について。社会に出ると、さらに専門用語が入ってくるので、そのあたりのときに日本語に不自由のある子は難しいと思います。

**【保護者・コミュニティについて】**

- 外国籍どうしのコミュニティーがあり、時に進路や生徒指導で正しくない情報が伝わっている。
- 保護者で日本語が通じない方が多く、面談で話が通じているのか不安を感じる。また、アポの時刻を守ってもらえないこともあった。
- 本人とコミュニケーションをとるのも大変だが、保護者とコミュニケーションをとるのも大変だと感じることもある。
- 地域に外国人学校や支援を充実させてほしいです。
- 保護者が進路指導や高校入試等の指導に理解を示してくれるかどうかが課題だと思います。
- 時間つぶしている場合は困る。日本の教育を理解してから就学してもらいたい。



これは、将来への「希望」の喪失である。浜松国際交流協会での聞き取り調査の際も、外国籍の子どもたちが青年になると、「どうせ自分は外国人だから…」と言うと伺った<sup>(7)</sup>。今後、彼らが日本に定着し、社会を形成する重要な構成員となっていくことを考えると、非常に深刻な問題である。これまで述べたような状況の中で、外国人の子どもたちが「希望」を抱くことのできる社会を実現するにはどうすればよいのか。その手がかりの一つとして、次章では浜松市立高等学校に設置されたインターナショナルクラスに関する調査について報告する。

### Ⅲ. 高校入試における外国籍生徒特別枠制度

#### 1. 調査の概要

浜松市立高等学校に設置されているインターナショナルクラスについて、在籍生徒や担当教員を対象に聞き取り調査を行った。同校で調査を行った主な理由は、以下の通りである。

- ① 同校のインターナショナルクラスは、主に南米系の外国人労働者子女が急増し、定住する状況の中で、有能な外国人子女の教育を保障する目的で、浜松市により設置されており、外国籍生徒入試特別枠制度のモデルケースといえる。
- ② 同校は進学校として、浜松市内の生徒や保護者に人気が高い学校である。
- ③ インターナショナルクラスに在籍する外国人生徒の意識を知ることで、外国人生徒の日本社会における「希望」という問題に、迫ることのできる可能性がある。
- ④ インターナショナルクラスに在籍した生徒は、将来、日本社会におけるロールモデルとなることが期待される。

聞き取り調査は、2015年11月10日に担任(平成27年度)及び担任経験のある教員(平成26年度・25年度)の3名、同年11月27日に在籍生徒6名を対象に行った。聞き取りの方法は、いずれも集団によるものである。生徒への質問は、口頭によるほか、質問紙への記入も依頼した。教師については、口頭による質問を行い、筆者が記録をとった。

#### 2. インターナショナルクラスへの入学と進路

インターナショナルクラスは、日系外国人労働者が急増する中で、外国人生徒の進路選択の幅を拡大するために、浜松市が独自に行っている制度である。『平成29年度 浜松市立高等学校 インターナショナルクラス選抜実施要項』によれば、設置の目的は、「学ぶ意欲と能力のある外国人に、その持てる力を最大限発揮することのできる高等学校を用意し、将来、母国と日本の『架け橋』となり、『世界都市・浜松』の発展に寄与する人材を育成する就学システムを整備する」とされている。そして、選抜の基本方針には、「一般選抜生徒と同程度の学力を持ち、本校卒業後、日本の大学又は母国の大学への進学を目指すことを目標とし、その教育を受けるに足る能力・適性を判定し、合格者を決定する」とある。学科は全日制の普通科で、定員は20人程度。日本人生徒とは入試日程や入試科目を異にする方法で入学者を選抜し、上記の目的と方針にあった生徒の獲得をめざしている。選抜方法を一般入試と分けることで、トラブルの回避も図ることができる。合格した生徒が在籍するのは1年間で、生徒は第2学年から通常のクラスに合流する。この間、芸術と体育を除く各教科を少人数で行うことにより、2年次からの学習に支障が来さないよう、丁寧な指導を受けることができる。基本方針にあるように、入学者のほとんどは大学への進学を希望している。2007(平成19)年4月に第1期生が入学し、2013(平成25)年3月末までに33名が在籍し、卒業31名、退学1名、転学1名であった。

表4は、平成19年度から平成27年度までの、入学生生の国籍を示したものである。合格者50名のうち、ブラジル人生徒が26名と半数を占めている。続いて中国人生徒の11名である。市内に在住者の多いフィリピン人やベトナム人など東南アジア系の入学生は、在住人口の割に少ない。また、オールドカマーである在日韓国人生徒も少ない。平成27年11月の調査時の在籍生徒は、ブラジル人1名、ペルー人2名、中国人2名、台湾人1名であり、ブラジル人生徒の数が少なくなっている。担当教師の話では、開設当

表4 インターナショナルクラスの合格者状況

平成19年度～平成27年度 単位：人

		ブラジル	アルゼンチン	韓国	中国	台湾	ベトナム	フィリピン	ペルー	アメリカ	計
志願者	男	13	0	1	5	0	2	2	1	1	25
	女	37	1	2	12	3	0	0	2	2	59
	計	50	1	3	17	3	2	2	3	3	84
合格者	男	5	0	1	3	0	2	0	1	0	12
	女	21	0	2	8	3	0	0	2	2	38
	計	26	0	3	11	3	2	0	3	2	50
合格率		50.0	0.0	100.0	64.7	100.0	100.0	0.0	100.0	66.8	59.5

「浜松市立高等学校 インターナショナルクラス 志願者・合格者数一覧」をもとに作成。

初は南米系外国人生徒の入学を想定していたが、中国との交流が盛んになるにつれ、南米系生徒の割合が減り始め、次第に中国系生徒が増加してきているとのことであった。その際、アルファベットを基軸とする文化と漢字文化の違いが、学力に影響を与えているのではないかと述べていた。筆者の経験からも、中学校での学習は国語に限らず、様々な教科で漢字が使われており、しかも学年ごとに難しくなっていく。漢字の素地を持たない南米系生徒や東南アジア系生徒にとって、我々日本人が考える以上に、漢字文化の影響が学力、ひいてはその後のキャリア形成に大きな影響を与えているものと考えられる。

表5は、平成19年度（平成22年3月卒業）から平成25年度入学生（平成28年3月卒業）までの7年分の進路を示したものである。国内大学への進学16名、国外大学への進学1名、専門学校への進学1名、国内での進学準備6名、企業への就職2名、転学1名、退学1名、帰国3名、不明2名である。約半数が、大学への進学を果たしている。企業への就職についても、有名ホテルに採用された生徒がおり、担当教員は後輩への励みになるとして喜びを語っていた。

インターナショナルクラスに入学するには、特別な配慮があるとはいっても、中学校段階では、ある程度上位の位置にいる必要がある。ただし、同校の日本人生徒のほとんどが大学へ進学することを考えれば、中学校卒業時点での日本人生徒との学力差は、容易に埋まるわけではない。多文化共生社会における外国人子女の活

躍を期待するには、さらに大学へ進みやすくなるような制度的手当が必要である。

静岡県西部地域で全日制の公立高校に入学するには、中学校で中位以上の成績を取っていることが必要であり、言語や家庭環境など様々な面で不利な状況にある外国人生徒にとって、公立高校への進学は難関となっている。私立高校に入学するにも、金銭面での負担が障害となる。そのため、外国人生徒の進学先の多くは、県立の定時制高校である。そのうちの約半数が、途中で退学していく。企業への就職にあたっては、ハローワークを通すことなく、親兄弟や親戚等の知り合いの紹介で職場を見つけることも多い。これにより、とりえず仕事についてお金を稼げばいいという意識が強くなり、将来に向けての計画やスキルの獲得に関心が向きにくくなっている。その背景には、「どうせ自分は外国人だから…」という諦念感がある。彼らの多くが日本に定住し、日本社会の構成員となっていく蓋然性が高い以上、この状態が長く続くことは日本社会にとって決して好ましいことではない。その点で、インターナショナルクラスに在籍・卒業した生徒の存在は重要である。彼らがロールモデルとして活躍し、日本に在住する外国人子女たちの心に「希望」の光を灯すことに期待したい。

### 3. 生徒への聞き取り調査

2015年11月27日に、インターナショナルクラスに在籍している生徒6名を対象に調査を行った（資料6）。調査の方法は、筆者との集団面

表5 インターナショナルクラス出身生徒の進路先

平成19年度入学生～24年度入学生 単位：人

入学年度	国籍	男	女	計	進 路 先
平成19年度 (2007年)	ブラジル	0	3	3	県内私立大学進学(1)、帰国(1)、帰国進学準備(1)
	中国	0	1	1	企業就職・起業準備(1)
	計	0	4	4	※平成24年4月1日現在
平成20年度 (2008年)	ブラジル	2	2	4	県内公立大学(1)、県内私立大学(1)、進学準備(2)
	中国	0	2	2	県外私立大学(2)
	韓国	0	1	1	米国大学(1)
	計	2	5	7	※平成24年4月1日現在
平成21年度 (2009年)	ブラジル	0	3	3	県内公立大学(2)、進学準備(1)
	中国	0	1	1	県外私立大学(1)
	ベトナム	1	0	1	県内私立大学(1)
	計	1	4	5	※平成24年4月1日現在
平成22年度 (2010年)	ブラジル	0	1	1	進学準備(1)
	韓国	1	1	2	退学(1)、転学(1)
	アメリカ	0	1	1	県内私立大学(1)
	計	1	3	4	※平成25年4月1日現在
平成23年度 (2011年)	ブラジル	2	3	5	県内国立大学(1)、県内私立大学(1)、県外私立大学(1)、看護専門学校(1)、不明(1)
	中国	1	1	2	県外私立大学(2)
	計	3	4	7	※平成27年11月筆者調査時点
平成24年度 (2012年)	ブラジル	1	1	2	県内企業就職(1)、帰国進学準備(1)
	中国	1	0	1	進学準備(1)
	台湾	0	1	1	進学準備(1)
	台湾・日本	0	1	1	不明(1)
	米国・日本	0	1	1	県内公立大学進学(1)
	計	2	4	6	※平成27年11月筆者調査時点
合 計		9	24	33	国内大学進学(16)、国外大学進学(1)、専門学校進学(1)、国内進学準備(6)、企業就職(2)、転学(1)、退学(1)、帰国(3)、不明(2)

本表は、浜松市立高等学校資料「インターナショナルクラス進路一覧」をもとに作成した。

接の形式で聞き取り調査を行うとともに、アンケート用紙への記入を依頼した。彼らは全員1年生で、2年生からは通常の学級に編入される。女子の中に男子が1名という構成であったが、和気藹々とした雰囲気が感じられた。

#### (1) クラスに対する生徒の意識

「インターナショナルクラスに入学してよかったと思うか。」という質問に対して、「とてもよかった」が5名、「よかった」1名であった。その理由としては、「クラスのメンバーが何でもいえる大切な友達です。すごく楽しくてクラスみんな仲良くて毎日がとてもHAPPY。入る前は不安で1年間がまんしようという思いだったけど、今はむしろ普通科に行きたくないくら

いです。すべてがよい。環境も先生方も優しく、とても親切で仲良くなれる。」「今までに学校にいたこともない個性豊かな人たちが集まってとても楽しいし、たくさん勉強になる！様々な国籍の子がいて、とても楽しいし毎日楽しいです。先生たちも丁寧でがんばって教えてくれる。様々な国の人が出て、違った文化もより知れて、みんなオープンなので居心地良い。」など、非常に肯定的な意見が書かれていた。学校内でマイノリティである彼らにとって、クラスが最も居心地のよい多文化共生が実現されている場所であることがわかる。また、少人数による丁寧な指導が行われており、生徒たちが満足感を抱いている様子も感じられた。

資料6 浜松市立高等学校での聞き取り・アンケート調査(生徒)

調査日:2015(平成27)年11月27日13:00~15:00

調査地:浜松市立高等学校

調査対象:インターナショナルクラス(INC)在籍生徒6名

(i) M.Nさん(女性、15歳、ペルー) (ii) H.Hさん(女性、15歳、ブラジル)

(iii) K.Iさん(女性、16歳、台湾) (iv) M.Yさん(女性、16歳、中国)

(v) T.Sさん(女性、15歳、中国) (vi) M.Kさん(男性、16歳、ペルー)

※インターナショナルクラスは1年次のみで、2年生からは通常学級(普通科)に入る。

<質問内容>

プロフィール	教科の学習	INCについて	今後の進路・生活	意見・考え
①性別 ②年齢 ③国籍 ④生誕地 ⑤誕生日間 ⑥暮らしてきた所 ⑦部活動 ⑧保護者 ⑨友人関係、コミュニティ	①得意教科 ②苦手教科 ③困っている教科 ④授業内容の理解	①インターナショナルクラスに進学してよかったと思うか。 ②2年生から普通のクラスに入ることについて不安はあるか。 ③改善が望まれること。	①高校卒業後の進路はどのように考えているか。 ②今後の生活に不安や心配なことはあるか。 ③今後、どこで生活したいと考えているか。 ④将来どのような仕事に就きたいか。 ⑤国籍の選択。	日本人や日本の社会の在り方などに関する意見など。 (自由記述)

<アンケート及び聞き取り調査のまとめ>

[ ]内は理由等。

	プロフィール	教科の学習	INCについて	今後の進路・生活	意見・考えなど
i	①女性 ②15歳 ③ペルー ④日本 ⑤15年10カ月 ⑥浜松市 ⑦創作ダンス部 ⑧父:ペルー育ちの日本人 母:ペルー人 ⑨中学時代の友達3人(日本人)	①生物(勉強していて楽しくわかりやすい。将来の夢が看護師。) ②現代社会、国語の現代文[理解できない。興味がわからない。] ③なし。 ④よくわかる	①とてもよかった。[クラスのメンバーが何でもいえる大切な友達です。すごく楽しくてクラスみんな仲良く毎日がとてもHAPPY。入る前は不安で1年間がまんしようという思いだったけど、今はむしろ普通科に行きたくないくらいです。すべてがよい。環境も先生方も優しく、とても親切で仲良くなれる。] ②不安はない。[市立生は皆優しいから。クラスのメンバーのみがいるから、部活動で普通科とも関わりある。勉強は好きなので大丈夫です。M.Yが共にいるから。楽しみだけど、クラスが変わるのがさみしいです。毎日がとても楽しく授業がすごく楽しい。] ③私は部活動で普通科の人と関わりがあるんですが、関わりが少ない人もいますので、もっときっかけをつくるべきだと思います。教室の夏は暑い、冬は寒いという環境。	①日本の大学へ進学希望。 ②ほとんどない。 ③日本。[日本が好きだから。日本で暮らしていきたいです。] ④医療関係(看護師)。東京へ行きたい。高校の生物の先生。 ⑤日本。	○日本がとっても大好きです。良い所も悪い所もある。日本LOVE。 ○日本人はとても親切な人が多く、治安も良い。けれど、まだ外国人に対する差別もそうですが、自分たちとは違うものに対して差別したり、悪い態度をとったりするところが欠点だと思います。 ○日本で外国人の同士が集まり、交流できる機会などを開いてもっと自分たちの文化を見つめる機会がほしい。
ii	①女性 ②15歳 ③ブラジル ④日本 ⑤15年8カ月 ⑥浜松市 ⑦英語部 ⑧両親は日本語が話せない。家ではポルトガル語。 ⑨親友はブラジル人。コミュニティはある	①英語[あんまり考えなくても自然にできるから。特別に勉強しなくても、自然に入ってくるから。] ②数学、物理[一つ分からなくなるとイライラして苦手意識が高まるから。何をやっているのかがよくわからない。出来ないうと思うからやりたくなる。] ③国語[どこで何をどう勉強すれば良いか分からない。] ④だいたいわかる。	①とてもよかった。[今までに学校にいたこともない個性豊かな人たちが集まってとても楽しいし、たくさん勉強になる!様々な国籍の子がいて、とても楽しいし毎日楽しいです。先生たちも丁寧でがんばって教えてくれる。様々な国の人がいて、違った文化もより知れて、みんなオープンなので居心地良い。] ②少し不安がある。[普通科の子たちになじめるか不安。自分の素ではいられない。人間関係に少し不安がある。] ③普通クラスの人と教室を近くして、2年生になった時に困らないようにしてほしい。	①海外の大学に進学し、外国語をもっと使えるようになり、より大きな世界を見たい。 ②ほとんどない。 ③母国または母国以外の外国。[日本では自分の可能性をもっと広げることができないし、仕事and子育てをしたいから、女性にやさしい国で生きたい!] ④国際関係or弁護士。 ⑤将来に有利な方。	○外国人の生徒のほとんどが定時制や仕事をしている。より外国人のために支援をして、もっと勉強してほしい!先生たちは生徒に対してネガティブすぎる。 ○日本はまだ外国人に対して偏見を持っていると思う。だから外国人に良い法律や制度を作って欲しいし、外国人が日本で勉強するために道をもっと開いてほしい。 ○日本に学校も入れない子どもたちがいるから、そこら辺を考えると、より道を開いてほしい。

外国人子女教育をめぐる中学校教師の意識と高校入試特別枠制度

iii	<p>①女性 ②16歳 ③台湾、日本 ④台湾 ⑤2年8カ月 ⑥台湾台中市、浜松市 ⑦英語部 ⑧父：台湾。ガイドで日本語検定1級。 母：日本人。 ⑨親友は台湾に1人いる。</p>	<p>①英語〔台湾での英語教育が日本より進歩していて、こっちに來ると授業が楽に感じた。〕 ②物理〔記号や原理が苦手だから。〕 ③特にないです。 ④よくわかる。</p>	<p>①とてもよかった。〔自分のことがより深く分かるようになり、授業が楽しく、各教科の先生も親しくて、それぞれの国の文化を知ることが楽しく、色々なことを学ぶので、お互い深め合えることが楽しいです。皆が一体化になっている。自分をより深く見つめ直すことができます。人数が少ない分、凄く自分の意見が出せる。自分を見直せる。毎日大変充実しています。〕 ②不安はない。〔自分は適応能力に自信があります。新しい環境に変わることは慣れているのもあり、得意であるから。〕 ③教室の温度。</p>	<p>①日本の大学へ進学希望。日本で勉強を続けていきたいです。 ②ほとんどない。 ③わからない。〔大学後はまだはっきりわからないが、世界を飛びまわりたいです。まずは、日本で暮らしたいです。〕 ④キャビンアテンダント。 ⑤まだわからないです。</p>	<p>○日本は良い国ですが、生徒の世界観が狭い感じはするが、接しやす。礼儀正しい。環境が凄く良い。日本の環境はきれいだ。 ○教科書に日本の良さじゃなく、歴史の日本のやった悪い出来事も教えてみると良いと思います。</p>
iv	<p>①女性 ②16歳 ③中国 ④中国 ⑤6年11カ月 ⑥ハルビン、浜松市。 小学校は日本、中学3年間は中国、日本に戻り中3で編入し、高校に合格。 ⑦創作ダンス部 ⑧父は中国。時々日本語を話す。 ⑨中国に親友がいる。</p>	<p>①数学〔計算が好きだから。〕、生物。 ②現代社会、国語現代文〔言葉が難しい。〕 ③特にない。 ④よくわかる。</p>	<p>①とてもよかった。〔みんなが元気すぎる。困ってもすぐ助けてくれるから。授業中わからないことがあっても個人的に教えてくれるところ。思っていたよりみんな個性豊か。〕 ②不安はない。少し不安がある。〔市立生は皆優しいから。楽しみだけど、少し不安です。勉強や人間関係が心配。〕 ③記述なし。</p>	<p>①日本の大学へ進学希望。 ②ほとんどない。 ③母国で仕事。韓国とアメリカに行きたい。 ④まだ考えていないが、病院で働きたいと思っている。 ⑤たぶん中国</p>	<p>○とにかく高校では勉強をがんばりたい。 ○外国人に対しての差別をなすべきであると思う。</p>
v	<p>①女性 ②15歳 ③中国 ④日本(福岡) ⑤15年 ⑥日本。小学校のころ少し中国で暮らした。 ⑦創作ダンス部 ⑧父母どちらも中国・日本語OK。家で混ざって話している。父は中国で働いている。 ⑨親友は中国と日本のハーフ。</p>	<p>①英語〔世界で活躍できる。話せたらカッコいい。将来に使えるから。楽しい。音楽・洋画に興味がある。〕 ②物理、国語〔理解できない。古文がわからない。興味ない。〕 ③国語、英語〔古文・漢文が分からない。高校英語が難しい。〕 ④だいたいわかる。</p>	<p>①とてもよかった。〔話すとき長くなるけど、今までしたことない経験、独特な性格の人に会えて、とても感謝している。皆で戦争とか国際問題について話し合ったり、真面目なことも…(笑)。少人数。何でも言い合える。多国籍。授業よく見てくれる。〕 ②不安はない。〔もっとたくさんの人に出会いたい。いいと思う。たくさんの人に出会える。〕 ③インタークラスをもっと知ってもらおう！</p>	<p>①日本の大学へ進学希望。〔日本の国立大学行って、中国、他一つの国に1年ずつ留学する。〕 ②ほとんどない。 ③わからない。〔世界中飛び回る。他の国で暮らす。〕 ④世界中飛び回れること。自分が好きなこと。特技。 ⑤中国なのかな。</p>	<p>○ほぼ毎年、中国に帰るけど、色々違いがある！日本にいたり、あまり海外の情報が入ってこない。 ○もっと海外と交流する場、機会がほしい！ ○もっと日本はオープンに！社会だけでなく「人」も海外と沢山接触した方がいい。高校生とかそれくらいから。</p>
vi	<p>①男性 ②16歳 ③ペルー ④日本 ⑤16年 ⑥浜松市 ⑦英語部 ⑧家ではほとんどスペイン語。姉・妹は日本語もあり。 ⑨高校では1組に数人。中学校の時の友達もいる。近くに集まる場所は教会で、話す人もいる。</p>	<p>①体育〔運動するのが好きだから。〕 ②物理〔計算が複雑だから。〕 ③英語〔単語や文法がなかなか覚えられない。〕 ④よくわかる。</p>	<p>①よかった。〔少人数だから困ったらすぐに先生に質問できる。細かく教えてくれる。みんな仲良くていい。〕 ②少し不安がある。〔一般のクラスとあまり関わりがないから。多少不安があるけど楽しみ。合流はいいと思う。〕 ③とくになし。</p>	<p>①大学進学希望。まだ決めていない。 ②少しある。 ③わからない。〔将来の夢は決まっていなから。他の国だと思ふ。〕 ④人を助ける仕事。人のために何かする仕事。 ⑤ペルー。</p>	<p>○日本は住みやすくていい。いい環境だと思う。 ○集団的自衛権に関して、やめた方がいい。平和主義のためにも、やめた方がいいと思う。選挙権の年齢を引き下げない方がいいと思う。外国人と日本人の交流する機会をたくさんつってほしい。</p>

2年生から普通科のクラスに合流することに対する不安感について問うた質問では、「不安はない」が3名、「少し不安がある」が2名、「不安はない」・「少し不安がある」の両方に答えた生徒が1名であった。「不安はない」と答えた

生徒の中には、「自分は適応能力に自信があります。新しい環境に変わることは慣れているのもあり、得意であるから。」というように、グローバル社会を生き抜く上での強さも見られた。「少し不安がある」と答えた生徒は、「普通

科の子たちになじめるか不安。自分の素ではいられない。人間関係に少し不安がある。」と素直な思いを吐露している。「不安はない」・「少し不安がある」の両方を答えた生徒には、「市立生は皆優しいから。楽しみだけど、少し不安です。勉面や人間関係が心配。」というように、期待と不安が入り交じった気持ちが表れていた。「市立生は優しい」という言葉は、インタビューの中でも他の生徒たちが繰り返し述べており、日本人生徒たちに安心感や信頼感をもっていることがうかがえた。このほか、「私は部活動で普通科の人と関わりがあるんですが、関わりが少ない人もいますので、もっときっかけをつくるべきだと思います。」「普通クラスの人と教室を近くして、2年生になった時に困らないようにしてほしい。」というように、普段の学校生活の中でも、普通科の生徒との関わりを多く持ちたいという要望も見られた。

#### (2) 日本での生活や社会の在り方について

自由記述には、日本人や日本の社会の在り方に関する意見が見られた。例えば、「日本がとっても大好きです。良い所も悪い所もある。日本LOVE。」「日本は良い国ですが、生徒の世界観が狭い感じはするが、接しやすい。礼儀正しい。環境が凄く良い。日本の環境はきれいな。」というように、概ね日本に好感をもちつつ、日本の生徒の世界観の狭さを指摘する意見があった。また、「外国人の生徒のほとんどが定時制や仕事をしている。より外国人のために支援をして、もっと勉強してほしい！先生たちは生徒に対してネガティブすぎる。」という強く支援や理解を求める意見もあった。この場合の「先生」とは、同じ生徒が前の質問に対し、「先生たちも丁寧でがんばって教えてくれる。」と答えているように、市立高校の先生方ではなく、日本の教師全般を指していると考えられる。

日本社会における外国人への偏見や差別に関しては、「日本人はとても親切な人が多く、治安も良い。けれど、まだ外国人に対する差別もそうですが、自分たちとは違うものに対して差

別したり、悪い態度をとったりするところが欠点だと思いました。」「日本はまだ外国人に対して偏見を持っていると思う。だから外国人に良い法律や制度を作って欲しいし、外国人が日本で勉強するために道をもっと開いてほしい。」など、切実な訴えも記されている。このほか、「日本に学校も入れない子どもたちがいるから、そこら辺を考えて、より道を開いてほしい。」というように、自分以外の外国人の子どもの将来を心配した記述もあった。

以上、聞き取りとアンケート調査の結果から、インターナショナルクラスの生徒たちは、①日本人及び日本社会がもっと外に開かれたものになること、②外国人に対する偏見や差別をなくすこと、③外国人子女に対する制度的支援を拡充すること、などを求めているといえよう。

#### 4. 担当教師からの聞き取り調査

2015年11月10日に、平成25年度・平成26年度・平成27年度担当の3人の教員を対象に聞き取り調査を行った(資料7)。専門教科、経験年数、担当となったきっかけはそれぞれ異なるが、どの教師もやりがいと誇りをもって取り組んでいる様子が伝わってきた。生徒たちの学校生活については、「少ない人数の中で、わきあいあいとやっている。」「2年生から普通クラスに合流するが、特に問題はない。1年間、少人数でしっかり指導してあることが大きい。入っていきなり普通クラスでは、うまくいかないかもしれない。」と述べられていた。手厚い教育が、成果を上げている要因である。

また、インターナショナルクラスの変容について、「浜松市の政策でやっているが、当時の理念とは少し離れてきている気もする。ブラジル人の子女対策だったものが、違ってきている。」という感想があった。インターナショナルクラスの入試制度は、いわゆるアフターマティブ・アクションであり、日本人生徒からの不満の声が上がることも予想される。しかし、「他の生徒たちとは別に入るため(入試の科目の違い)、日本人の生徒との間でトラブルはな

資料7 浜松市立高等学校での聞き取り調査(教員)

日時:2015年11月10日(火)15:15~16:00

教師	担任年度	教職経験	専門教科	担当になったきっかけ
O.K	平成25年度	30年	英語	以前から興味をもっていた。
N.W	平成26年度	18年	芸術(書道)	上司からの命による。
U.A	平成27年度	36年	国語(現代文・漢文)	以前からフィリピンの子どもたちの教育に関するボランティアに参加していた。現在も携わっている。

	質問項目	回 答
1	インターナショナルクラス担当のやりがい	<ul style="list-style-type: none"> <li>○もともと興味をもっていたので、楽しくできている。</li> <li>○普通のクラスと変わらない。</li> <li>○クラスの子一人一人と接することができる。</li> </ul>
2	インターナショナルを担当しての苦労について	<ul style="list-style-type: none"> <li>○少人数なため、他のクラスよりもかえって苦労が少ない。</li> <li>○追試でがんばらせている。</li> <li>○人数が少ないからといって手がかからないとは限らない。</li> </ul>
3	子どもたちの日本語の理解力等について	<ul style="list-style-type: none"> <li>○かつてはブラジル系の子どもが多かったが、中国系の子どもが多くなってきている。</li> <li>○ずっと日本に暮らしている子が多いので、授業も日本語で進められる。</li> <li>○来日して1、2年でも、授業内容を理解できる優秀な子どもがいる。</li> </ul>
4	学校生活の様子について	<ul style="list-style-type: none"> <li>○56人の人数なので、大きなトラブルはない。</li> <li>○部活動もしっかり参加している。</li> <li>○イベントを楽しんでいる。</li> <li>○他のクラスから遊びに来る子がいる。</li> </ul>
5	学習内容の理解の様子	<ul style="list-style-type: none"> <li>○1年間のインターナショナルクラスがあるので、2年目からの授業にスムーズに入れる。</li> <li>○美術・体育は1年生のうちから普通クラスの生徒と一緒にやっている。</li> <li>○中には進学クラス(2クラス)に入っていく子もいる。</li> <li>○現在の6人の生徒の中で、英検2級が2人、準2級が2人いる。</li> </ul>
6	進路希望の状況	<ul style="list-style-type: none"> <li>○大学進学を希望している。</li> <li>○日本の大学をめざしている子が多い。</li> <li>○静岡文化芸術大学を希望して。このあたりが目標としてよい。</li> </ul>
7	卒業後の進路について	<ul style="list-style-type: none"> <li>○大学卒業後も日本で働く子が多い。</li> <li>○高校を卒業して就職している子もいる(経済的理由)。</li> <li>○アメリカの大学に進学した子もいる。</li> <li>○母国の大学へ入学した後、日本に戻って来た子もいる。</li> <li>○フリーターをしている子もいる。</li> </ul>
8	意見・考えなど	<ul style="list-style-type: none"> <li>○浜松市の政策でやっているが、当時の理念とは少し離れてきている気もする。ブラジル人の子女対策だったものが、違ってきている。</li> <li>○他の生徒たちとは別に入るため(入試の科目の違い)、日本人の生徒との間でトラブルはない。しかし、同じ5科目でやれば差が付き、もめる原因になるかもしれない(特に入試で落ちた子どもから)。</li> <li>○少ない人数の中で、わきあいあいとやっている。</li> <li>○2年生から普通クラスに合流するが、特に問題はない。1年間、少人数でしっかり指導してあることが大きい。入っていきなり普通クラスでは、うまくいかないかもしれない。</li> <li>○浜松には約2万人の外国人がいるが、彼らのことを真剣に考えている人が少ない。ごく一部の人が活動しているにすぎない。一般の意識を高めないといけない。</li> </ul>
9	その他	<ul style="list-style-type: none"> <li>○教室が狭い。20名定員だが10名までが限界。40名の子どもをもつよりも、目が行き届く。</li> <li>○お金が払えない子、一人親の子もいる。経済的理由で、進学をあきらめた子もいる。</li> </ul>

い。しかし、同じ5科目でやれば差が付き、もめる原因になるかもしれない(特に入試で落ちた子どもから)。」と述べられているように、受験機会と科目を一般入試と分けることで、その危険性を回避してきた。しかし、生徒への聞き

取り調査では、市立高校を目指していた日本人の友人が不合格となった時に、「いいなあ…」と言われて気まずい思いをしたことがある、と語った生徒もいるので、子どもたちの間では多少の感情のもつれがあることも推測される。

このほか、「浜松には約2万人の外国人がいるが、彼らのことを真剣に考えている人が少ない。ごく一部の人が活動しているにすぎない。一般の意識を高めないといけない。」という意見は、浜松市の外国人支援や市民の意識の状況を端的に指摘しているともいえよう。

#### IV. 結びにかえて

本研究では、浜松市での調査を通して、次のようなことが明らかとなった。

- ①外国人子女の在籍する中学校の教育現場では、支援員の派遣や日本語教室などの施策がなされているにもかかわらず、事態が大きく改善しているわけではないため、行政や企業への不満が蓄積していること。
- ②現場の教師は、外国人生徒への対応だけでなく、保護者とのコミュニケーションにおいても困難を抱えていること。
- ③浜松市立高等学校のインターナショナルクラスでは、外国人生徒が学校に好感を持ち、将来への希望を抱くことができていること。

最後に、教師と外国人子女家庭との関わりについて少し述べておく。外国人労働者の家庭では、雇用が不安定なこともあり、給食費や学年費などの校納金を滞納することがしばしばある。滞納金の督促は、事務職員が文書を作成し、学級担任が生徒を通じて保護者に渡すことが一般的である。しかし、督促状が保護者に届いても、なかなか納入されないことが多い。この場合、まずは学級担任が保護者に連絡を取って納入を促すことになるのだが、連絡がつかなかったり、日本語が通じなかったりして、用件を伝えることが難しい。持ち合わせの金銭がないという理由で、納入延期を請われることも多い。時には、生徒が突然登校しなくなり、滞納したまま所在不明になることさえある。では、保護者が本当に校納金を払うお金がないのかといえば、必ずしもそうとは限らない。就学援助を受けている家庭でも、外国人生徒のほとんどは各自でスマートフォンを持っている。保護者には、校納金を第一優先で納める意識が希薄

なのではないかとと思われる。このような生活感覚の違いが、教師と保護者の間に摩擦を生じさせることとなる。本来、教員が滞納金の督促を行い、取り立て人となること自体、果たしてよいのかどうかという問題もある。企業の活動によって生み出された外部不経済としての外国人子女の教育・進路問題について、制度設計の時点から見直さなければならぬ時が来ているともいえよう。

#### 【註】

- (1) 菅井(2003)は、社会的統合をめざす政策を、「外国人がある国に住む際には、受け入れ国民と同程度の社会的、経済的な接触を持ち、社会に貢献できる形の参加をすることを推奨する政策」としている。
- (2) 加藤(2008)は、日本で生まれ育った外国人子女の言語状況について、日常の言語生活には不自由がなく見えても、教科内容を理解するのに必要な認知言語能力が養われていないために、学習についていけず、精神的にも不安定になると指摘している。
- (3) 小内・小野寺・古久保(2000)は、群馬県大泉町の小・中学校の教員10名と日本語指導助手2名への聞き取り調査から、教師の意識には、外国人子女を別学で教えるという教育の分離＝別学志向があることを指摘している。
- (4) 細川(2011)は、東海地方4県における全日制高校の外国籍生徒入学特別枠制度について調査し、外国人子女が将来選択し得る進路を狭めないためには、普通科以外の学科へも進学が可能となるよう配慮することが必要であるとしている。
- (5) 静岡県政策企画部統計調査課「平成28年度静岡県学校基本統計(学校基本調査報告書)」によれば、2016年5月1日時点で、県下の高校生100,664人のうち、外国人生徒は全日制・定時制合わせて998人であった。なお、静岡県公式HP(平成29年2月29日更新)には、以下のような資料が公開されている。静岡県民生部多文化共生室『静岡県外国人労働実態調査(外国人調査)報告書 平成20年3月』2008年。『静岡県外国人労働実態調査(企業調査)報告書 平成20年3月』2008年。『静岡県多文化共



生アンケート調査(日本人調査・外国人調査)報告書 平成22(2010)年2月』2010年。その後このような大規模な調査は行われていないため、滞日外国人の生活・労働実態等を知る上で、重要なデータである。

(6) 2016年3月18日、浜松市立遠州浜小学校内の事務局・教室にて聞き取り調査を行った。

(7) 2016年3月17日、浜松国際交流協会事務局にて聞き取り調査を行った。

### 【文献】

梶田孝道・丹野清人・樋口直人編(2005)『顔の見えない定住化—日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク』名古屋大学出版会。

加藤映子(2008)「外国人児童生徒の言語教育に関する一考察：言語共生のために」『大阪女学院大学紀要』第5号, pp.45-63.

小内透・小野寺りか・古久保さくら(2000)「日系ブラジル人の定住化と学校教育の機能—群馬県大泉町を事例として—」日本教育社会学会『日本教育社会学会大会発表要旨集録』No.52, pp.245-250.

志水宏吉・清水陸美編(2001)『ニューカマーと教育—学校文化とエスニシティの葛藤をめぐる—』明石書店。

菅井英明(2003)「社会的統合政策に基づく異文化間教育導入の課題」神田外語大学『異文化コミュニケーション研究』第15号, pp.1-16.

細川卓哉(2011)「外国人生徒の高校進学に関する教育課題—特別入学枠に着目して—」名古屋大学大学院教育発達科学研究科教育科学専攻『教育論叢』第54号, pp.3-12.

宮島喬(2013)「外国人の子どもにみる三重の剥奪状態」『大原社会問題研究所雑誌』No.657, pp.3-18.

吉田多美子(2008)「外国人子女の教育問題—南米系外国人を中心に—」国立国会図書館調査及び立法考査局『人口減少社会の外国人問題 総合調査報告書』, pp.125-140.

号：15H06452、研究代表：鈴木正行)、ならびに科学研究費助成金(基盤研究(C)、「多文化・多民族化の進展下における職業倫理形成に向けた総合的カリキュラム開発研究」、課題番号：17K04869、研究代表：鈴木正行)による研究成果の一部である。浜松市中学校教育研究会社会科学研究部の先生方、浜松市立高等学校インターナショナルクラスの生徒の皆さんと先生方、浜松国際交流協会、NPO法人浜松外国人子ども教育支援協会など、調査にご協力いただいた皆様に、深く感謝申し上げたい。

### 付記

本研究は、科学研究費補助金(研究活動スタート支援、「外国人労働者子女の定住化と教育問題に関する総合的教材開発研究」、課題番